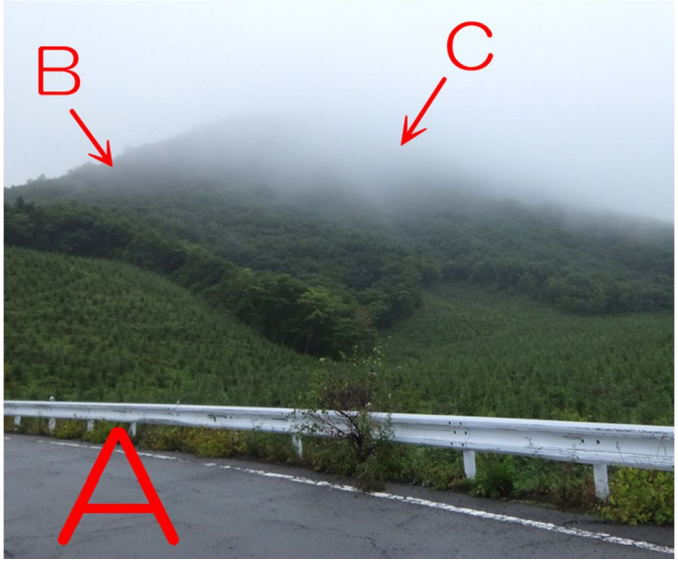
「日々の理科」（第 808 号） 2016（H28),-9,22

「霧と雲の関係（２）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

雲の正体は「霧（霧粒）」であることを実感し、その事実を子どもたちに伝えるには、実際に「雲の中に突入する」のが一番確かな方法だ。それは容易なことではないが、決して不可能でもない。



上の写真は、北軽井沢から倉渕（高崎市）へ抜ける県道 58 号線から、二度上峠（にどあげとうげ）方面を見上げたものである。写真を撮ったＡ地点では霧に巻かれていなかったが、駒髪山（こまかみやま）は、雲の中にある。雲種はよくわからないが、層雲の一種だろう。層雲は別名「きりぐも」とも呼ばれている。

地形図で対比してみるとよくわかる。数字は標高である。写真を撮ったＡ地点は、東日本震災の復興事業の一環で、落葉松の樹を大量に伐採・供出したので、視界が開けている。峠道なので、県道はぐんぐん高度を稼ぐ。写真を見ると、Ｂの大ヘヤピン・カーブ付近で雲に入り始め、Ｃの峠は完全に雲の中のはずである。恐らく峠は濃霧で、非常に視界が悪いはずである。こうした「予想」は、理科の授業だけでなく、教師にとっても、日常的に常に大切なものである。

写真がＢの大ヘヤピン・カーブの手前である。ここまでの標高差は約 110m。霧が頭上数メートルまで迫ってきた。雲底高度に達した一瞬である。

霧は次第に濃くなる。対向車の安全の為、ヘッドランプを点けて走行し、５分後に二度上峠に到着した。Ｂ地点からの標高差は約 60m、Ａ地点からは約 170m 登った。完全にガスっている。「雲の中」に入ったのだ。視程（直線距離で地上物が辛うじて見える範囲）は 20m 程度の濃霧だった。なかなか良い「教材」ができたと思う。さっそく、質問した子どもに話そう。